

森愛なる人

文 久津輪雅

協力 黒田 悟一

思わず「あ」と声を上げてしまった。晩年の黒田辰秋がゴッホの椅子とともに写っている。今年三月、愛知県の豊田市市民芸館で開かれた黒田の回顧展に掲げられていたパネルである。私は四年前に『ゴッホの椅子』人間国宝・黒田辰秋が愛した椅子』という本を執筆した際、ご親族から黒田が晩年までこの椅子を自宅に置き愛用したと聞いて、裏付ける写真を探していたのだった。出版には間に合わなかったが、この一枚にやっと巡り合うことができて嬉しかった。

黒田辰秋は二〇世紀を代表する木漆工芸家である。一九〇四年、京都に生まれ、若くして柳宗悦らの民藝運動に加わり、それまで行われてこなかった木工と漆の一貫製作によって新たな工芸の世界を切り拓いた。自身は町家育ちで椅子とは無縁の生活だったが、若い頃にゴッホの絵に描かれた素朴な椅子に憧れ、椅子製作にも取り組んだ。後の代表作に、映画監督・黒澤明の別荘の椅子や、皇居・新宮殿の椅子がある。一方、写真の椅子は六〇年代に陶芸家の濱田庄司がスペイン南部の村で見かけて素朴さに感銘を受け、たくさん買い求めて一脚を黒田に贈ったものである(ゴッホが描いた椅子に似ていることから、「ゴッホの椅子」

の名で親しまれるようになった椅子である)。後に黒田自身も皇居の椅子を設計するにあたり、椅子の原点を見たいと同じ村を訪ねている。

この写真と出会ったことで、私は黒田自身の椅子製作の苦労や、素朴なゴッホの椅子への黒田の思いを改めて知りたくなり、所縁のある人たちを訪ねることにした。

黒澤明の椅子は「王様の椅子」とも呼ばれ、厚さ九センチものナラの板で組まれた豪快なものだ。この椅子は京都の自宅工房ではなく、岐阜県付知町(現在は中津川市に編入)で原木を買い求め、現地に作業場を借り、一九六三年から六四年にかけて二年がかりで製作した。

「いやあ、懐かしい。大鋸を挽いているのは木挽の實一さんですよ。製材機を操作しているのは私の父です」。写真を見てそう語るのは熊谷和彦さん(七三)。父親の代まで付知で製材業を営んでいた。



1962年秋頃、黒澤明の椅子の製材風景。この製材所は画家・熊谷守一の生家でもあり、熊谷和彦さん(本文参照)は守一の兄の曾孫にあたる。



黒澤明の椅子を製作中の黒田。P10/豆鉋で椅子を成形。P9/納期の関係による材の乾燥不足等の理由で製作中から無数のヒビが入ったため、ナラの薄板に漆を塗り差し込んでいる。

P9,10 写真/黒田乾吉氏撮影



黒田辰秋

黒田 辰秋(くろだ・たつあき) 1904-1982 木漆工芸家。京都市祇園清井町に塗師職人の末子として生まれる。木地から仕上げまでの一貫製作を志して実家を離れ、柳宗悦らの民藝運動に共鳴して上加茂民藝協団に参加。類い稀な造形能力で独自の木工芸の世界を切り拓き、国内外の注目を集めた。60歳の時、岐阜県付知町(現・中津川市)に滞在し、映画監督・黒澤明の別荘の家具セット一式を製作。3年後、宮内庁より新宮殿のための椅子製作を依頼され、設計に先立ちヨーロッパ10数カ国を初めて訪問し椅子文化を学ぶ。中でもスペイン・グアディス村の「ゴッホの椅子」に強く惹かれる。帰国後、岐阜県高山市に滞在して皇居の椅子を完成。1970年、木工芸分野で初の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定。作品の数々は志賀直哉、武者小路実篤、川端康成、小林秀雄、白洲正子など、目利きと呼ばれた著名人に愛好されたことでも知られる。



上/「ゴッホの椅子」と黒田。豊田市民芸館が黒田の没後に自宅から引き取った大量の資料の中に埋もれていた1枚。(1976年頃撮影) 右/ゴッホが描いた「ファン・ゴッホの椅子」(1888年)。「ゴッホの椅子」の愛称はこの絵に由来する。



ゴッホの椅子に深く魅了された黒田は1967年、そのルーツであるスペイン南部の村を訪れ、職人による椅子づくりの様子を仔細に記録・撮影した。リンク先からその貴重な映像を見ることができる。



https://youtu.be/WhpZahd_o0M

付知は背後に広大な国有林を抱え、特に良質の天然ヒノキを多く産出していた。国が大面積の皆伐、大量の木材生産を続けていた時代で、ナラやミズメなどの広葉樹の巨木もヒノキを伐るついでにどンドン伐られた。付知には木工業が栄え、熊谷さんの実家はそれら木工業者のための一番大きな製材所だった。

黒田が求めたナラの丸太は、まず製材機にかけられる大きさに木挽職人が大鋸で挽き、それから熊谷さんの父が製材しようだ。製材後の板を乾燥させた場所も案内してくれた。「ここですよ。当時は天日乾燥だけで、乾燥施設などなかったですからね」

ていたという。「今思えばもったいないことをしていましたけど、木の用途なんてそんなものでした。広葉樹で家具を作るなんて、斬新な仕事だと思いましたがね」黒田が椅子の製作に取り組んだのはこんな時代だった。暴れるナラに手こずりながら、それを技でねじ伏せるようにして、自ら思い描いた造形を何とか完成させた。世間の評価は高く、木工家具が注目され、用材としてのナラが評価されるきっかけになった。しかし材の乾燥不足に加え、構造的に無理がある部分もあり、完成後も大きな割れやヒビが生じ続けた。完璧を求める黒田の胸の内は、必ずしも満足ばかりではなかったかもしれない。

黒田が濱田庄司からゴッホの椅子を贈られたのは、ちょうど黒澤の椅子を製作していたこの時期である。三年後に自身もスペインを訪れ、その製作工程をつぶさに見学した。樹齢五〜六年ほどのポプラの生木の樹皮を削り、穴を開け、細く割った背板や貫を差して、わずかに五分ほどで一脚を組む。座れば多少ぐらぐらするが、それでも構わない。

黒田の木工とは、内から湧き上がる絶対的な造形と、自分の思い通りにならない木という生命ある素材との真剣勝負であり、だからこそ畏敬を持って木に向き合ってきた。しかしこのゴッホの椅子づくりにはまったく無理がない



黒澤明の別荘用の椅子。「王様の椅子」の愛称にふさわしい圧倒的存在感を放つ。拭漆楕円花文椅子 1964年 高さ約130、幅85、奥行80センチの大作。(所蔵/豊田市美術館 撮影/消忠之 協力/imura art gallery)

久津輪 雅(くつわ・まさし) 岐阜県立森林文化アカデミー教授。1967年生まれ。筑波大学国際関係学類卒業。NHK報道ディレクターを経て、岐阜県高山市にて木工を学び、イギリスで家具職人として働く。2006年より現職。生木を手道具で削って小物や家具を作るグリーンウッドワークを日本で初めて教育に導入し、普及に努める。著書に『ゴッホの椅子』『グリーンウッドワーク』。

のである。そのおおらかさを目の当たりにして、黒田は「全く満足した気分」になったと記している。ゴッホの椅子を見つめる写真の中の黒田は、優しい眼をしている。ものづくりはおおらかで良いのだと教えてくれたこの木の椅子への、敬意や愛着がにじみ出ているように私には感じられるのだ。

ナラは広葉樹の中でも特に乾燥が難しい。まして九センチもある分厚い板は、現代の乾燥技術をもってしても数年かかる。しかし決められた納期があったため、黒田はほとんど生木のままで製作に取り掛からざるを得なかった。その後、製作が進むにつれて木が縮み、割れ、大変な苦勞を強いられたことは、当時作業を手伝った早川謙之輔の『黒田辰秋 木工の先達に学ぶ』に詳しい。「大きくて真っ直ぐな丸太が揃ったからナラであの椅子を作ったんでしょうけど、私からすればナラはとんでもない木なんです」。今も付知で製材業を営む桂川眞壽雄さん(六七七)は言う。ナラは割れるし暴れるので、当時はヒノキの十分の二の価値しかなかった。だから直径六〇センチ以上のナラのほとんどを細く挽いて洗車ブラシの柄にしていたという。車が売れ、洗車ブラシが捌けた時代である。「でもあの椅子をヒノキで作っても面白くない。とんでもないナラで作ったからこそ、迫力が出たんでしょうね」 「そもそも当時の家には家具がないから、家具を作るといふ発想もなかった」と言うのは、木工業の小松利彦さん(七三)。中学卒業後から付知の木工所で働いたが、ナラやミズメやケヤキの巨木から作っていたのは扇風機などを梱包する薄板だった。道路を隔てた目の前に黒田たちの作業場があり、毎日見に行っ